



武内直亮
たけうち なおひこ
株式会社ブレインマークス・ビジネスコンサルティング

大手CVS（コンビニエンスストア）で、財務改善、経営改善、経営支援を担い、企業の「本質的な課題解決」に尽力し、多くの経験と実績を積み重ねた。人材育成を中心とした人事評価制度の構築や理念を中心とした自主性を生み出す組織づくりを得意としている。幅広い経験と実績に裏打ちされたコンサルティングスタイルはクライアントから高い信頼を獲得している。



ヤマノ印刷の職場風景

10年後のためのアドバイス

ヤマノ印刷の組織は、人員が少なくても多品種・小ロットに対応できるオンデマンド印刷を取り入れたり、大型印刷機を多数保有しなくても協力会社とともに大量印刷できる体制を整えたりと、業務の選択と集中が明確になっていること。また、近年はより付加価値が高い企画・制作に軸足を移す方針を掲げています。現在、山野社長はこれらを会社の強みとしてさらなる成長を目指すため、私たちがブレインマークスとともに組織内のビジョン共有に向けた理念の言語化とともに、それを確実に実行できる仕組みづくりに注力しています。印刷業は電子化の波が、国内人口の減少にもともなう需要減や単価安などに悩まされていますが、発送・管理を請け負うサービス、生産用品や医薬品などのパッケージ関連などはまだまだ伸びしろがあるとされています。こうした新市場開拓のアイデアも含め、さまざまな角度から支援させていただきたいと思えます。

山野 高社の得意分野であるパンフレットや冊子などの印刷の仕事も多く受注できることが、社員の強みを発信しました。たとえば医療機器・製薬業界の企業、教育機関、官公庁などのパンフレットや冊子などは情報量や専門的な内容が多いので、発注者側と多く人々に打ち合わせを重ね、その内容ができるだけわかりやすくするように徹底しています。当社の強みはこのように顧客に寄り添う姿勢であり、おかげで半世紀以上、お付き合いが長いという会社もあるほどです。他方、あらたな強みをつくることも重要だと感じ、企画・制作力の向上やスピーディな対応といった体制面の強化にも力を入れました。そして、これらの強みを明確に表現するために、現在は「コミュニケーション」。

武内 社長を高く印刷業の未来を切り拓いてほしいと思います。

山野 正副、若い頃はやりがいを感じられることが見つけられず悩んだこともありました。今はこの仕事を心の底から「有意義だ」と感じています。たとえばペーパーレス化の推進のなか、印刷業はさらに苦戦を強いられることになると思われていますが、私としては従来の作業を「仕組み化」すれば、もっと効率化をはかれるし、付加価値の高い仕事をつくり上げることもできると考えています。その一環として、当社ではカタログなどの販促ツールをみずから企画・デザインし、制作するに力を入れています。

10年後をリードする 未来企業 117

叔母が創業した印刷業を承継しペーパーレス化の荒波を乗り越える!!

1960年創業のヤマノ印刷(東京都千代田区)は、従業員数は小規模ながらも大手企業などと半世紀以上にわたって信頼関係を構築してきた。そして、3代目となった山野俊一社長は、生物学者・ダーウィンの「生物は強いものが生き残るとはかぎらない。変化に対応したものだけが生き残る」という言葉を胸に挑戦をつけているという。さっそく、その夢と思いにブレインマークスの武内直亮氏がアプローチした。



山野俊一

やまの しゅんいち
ヤマノ印刷株式会社 代表取締役社長

1974年東京生まれ。体育教師を目指し、東海大学体育学部を卒業。教員になる夢は叶わず、大手自動車販売店に入社。営業職の経験を経て、24歳でヤマノ印刷に入社。41歳で元代客パトロンを受け取り、代表取締役社長に就任。現在は販促ツール制作を中心に事業を展開中。

したのですが、卒業時は教員の募集が極端に少なく、早々にあきらめました。その後、自動車ディーラーとして働きましたが、営業成績に追われる日々にやりがいを感じることはできず退職し、なんととなく「すこ」に退職しました。そんなとき、「両親から『フラフラしないで働け』というわがままな言葉がある印刷業を手伝うことになったのです。もともと会社を継ぐつもりはなかったのですが、あのとき、両親の言葉を受け入れていなかったら、叔母が立ち上げたこの会社を承継させるのは大変だったと思います。身内には私のほかにも後継者がいなかったため、おそろしくまったく別の人が引き継いでもらおうか、廃業ということになっていったでしょう。」

武内 そのうえで、自分なりに工夫したことはありましたか。
山野 現場に足を運ぶ。一方で「これからはインターネットを通じたコミュニケーションも重要になる」と考え、この業界としては比較的に早くからホームページでの受注対応やホームページの開設などに取り組みました。こういった業務は従来業務と比べて何をやっているのかがいまいちとわからず悩んでいたため、正直当初は「余計なことに時間と金を使っている」と感じ、当時社長だった父親とは態度となくやり合っていました。しかし、社会的にペーパーレス化がすすむなか、印刷需要が目減りしていったのは火を見るよりも明らかだったので、「小さな印刷会社が生き残るには、積極的に情報発信をしていかなければならない」と、これらのことは使命感を持って取り組むつもりでした。